

## V 植物

### 1 豊田市の植物の概要

愛知県には約 3,620 種の維管束植物（シダ類と種子植物）の自生種があると言われていて日本全体の約 7,000 種の約 50%が生息していることになる。では県面積（5,165km<sup>2</sup>）の約 5 分の 1 の豊田市（918.32 km<sup>2</sup>）では、県全体の何割の植物が生息しているであろうか。旧町村からの合併で面積が広くなり、標高 3.2m の逢妻女川に接する駒新町付近の平地から標高 1,240m の稲武町面ノ木峠の亜高山までの変化に富んだ市域のため植生も変化に富んでいるわけである。しかし、この 8 年間（2008 年から今日まで）面的に調査したけれども、標本をあまり採集しなかったこともあり、本報告書の資料編には多数の植物種数が出ているが証拠物件の標本が残っていないことで、この調査での豊田市の自生植物種数は確定でき難いのである。

昨今、他市では標本を基にした植物誌が出されていることから、植物種数の比較ができ、またどの市にどれだけ自生種が生育しているかが分かる。

幸いなことに、2002 年から 3 年間かけて行った自然環境基礎調査時に採集した標本と豊田市自然観察の森の職員が採集した標本が豊田市自然観察の森に整理保管されていること、それに、今回の調査で採集した標本を合わせ現在（2015 年 2 月現在）の豊田市の自生植物数を出すことにした。まだ、整理されていないこの調査の百数十点の標本があるので、完成した段階で修正したい。それが下記の表である。

表 V-1 標本に基づく豊田市維管束植物の種数一覧表

(2015 年 2 月 14 日現在)

区分	シダ類	種子植物					合計
		裸子植物	被子植物				
			単子葉	双子葉植物			
				離弁花類	合弁花類		
自生	種	123	11	312	421	358	1,225
	品種・雑種	5	2	6	20	4	37
	小計	128	13	318	441	362	1,262
植栽種または逸出種	0	5	22	44	13	84	
外来種	1	0	38	74	73	186	
合計	129	18	378	559	448	1,532	

市内にもともと生育していた植物を自生種とし、品種・雑種や植栽された種や野外に進出した種（逸出種）、それに外国から入ってきた帰化植物（外来種）を除くことで他市との種数を比較することができる。

豊田市の自生種は 1,225 種で、県内の 34%が存在することになる。この県の自生植物種数は標本を基にしているが確定な数ではなく約 3,620 種（レッドリスト愛知 2015）としている。

報告書の分類は大場秀章氏編著の植物分類表に基づいて分類しているが、他市との比較のために旧分類表により数値化した。「品種・雑種」は本来なら自然に存在している植物であるから自生種として取り上げたいが、遺伝子の違いによる種内の変化種であるので本来の植物種でないとして除い

た。「植栽種または逸出種」の標本が 84 種あるが、たまたま道路端や公園等に植栽されていた種（植栽種）や植栽種が野生化した種（逸出種）を標本にしたものの数である。逸出種は将来的には「外来種」になってしまうであろう。それに「外来種」は元来帰化植物と称していた外国から入ってきた種で、ここでは「外来種」として扱った。

豊田市の植物種数の県内での多少は、他市でも標本が残されている安城市・瀬戸市・北設楽の統計が手元にあるだけであるから、これらの市との比較だけになる。シダ類では安城市 71 種、瀬戸市 209 種、稲武地区（北設楽の一部）294 種で、豊田市の 129 種は、同じく山地が多く海辺がない瀬戸市・稲武地区よりも大分少なかった。安城市は山地が少なく、面積的にも 10 分の 1 では比較にならない。それにしても豊田市のシダ類の標本は少なかった。

表 V-2 愛知県内の市の自生植物の種数一覧  
(標本に基づく公表されている維管束植物の種数)

区分	面積 (km <sup>2</sup> )	自生植物種数
<b>豊田市</b>	<b>918.5</b>	<b>1,225</b>
(市内稲武地区)	98.6	1,238
安城市	86	651
蒲郡市	56.8	959
新城市	118	1,353
豊橋市	261.3	1,452
瀬戸市	111.6	1,332

\*自生種は亜種や変種を含めた種数（品種、雑種、外来種を除いた種数）

\*安城市は新編安城市史 11 資料編自然 第 4 章植物

蒲郡市、新城市、豊橋市も上記の資料

\*瀬戸市は 2012 年、瀬戸市の植物（愛知県地域別植物誌 2）

\*豊田市内稲武地区は 2006 年、北設楽の植物：愛知県新城設楽農林事務所

豊田市は面積的に広いのに自生種数が少ないのは、標本が残っていないからで、今後まだ整理していない種が加われば多少多くなり、稲武地区の種数には近づくであろう。地理的に同じような海から遠く、山地を持つ瀬戸市・新城市に並ぶ種数になるのが面積的には 9 倍の豊田市では相当な数字が出てくる可能性は高い。豊田市の植物の特徴は、次のようである。

#### (1) 標高差による植物相の多さ

標高 3.2m の逢妻女川に接する駒新町付近の平地から標高 1,240m の面ノ木峠と標高差が約 1,200m あるから、低地では暖帯性植物が多く、高い山では温帯性植物（または亜高山性）が見られるということで総称して豊田市は温暖性植物の自生地であると言える。高山のモミ・ツガ・ブナ帯から低地のシイ・カシ類と植物相の幅が広い。



写真 V-1 面ノ木峠の原生林



写真 V-2 高岡地区から見た猿投山

### (2) 東海丘陵要素植物の存在

標高差による植物相の豊富さに加え、東海地方に広がる東海層の堆積地が市内にも幅広く見られ、そこに東海地方特有の植物（東海丘陵要素植物）の自生があり、植物相の増える大きな特徴となっている。その特徴が見られるのが東海丘陵湧水湿地であるラムサール条約登録の矢並湿地等の3湿地が代表の湿地である。

### (3) 人為的な行為による植物相の減少

全国共通の事項であるが、特に低地の丘陵地の開発で、丘陵地の植物の減少、耕地整理で畦草が外来種にとって代わられる。特に市内では東海丘陵要素植物の消滅等がある。

山地では里山の荒廃、植林地の増大と無間伐が山地の自生植物の減少につながっている。

## 2 植物調査

植物を捉えるには点と線だけでなく面的な調査が必要になる。山地では頂上から麓まで道があれば道をたどれば大体植物は捉えられるが、谷あり、小川ありで湿気の多少、また気温の高低差で生育植物種に違いがあり、全体の把握には時間と労力が必要になる。

捉え方には植物相調査（植相調査）と植物生態調査（植生調査）の二面から行う。

### (1) 植相調査

植物にはいろいろな種があり名前を知らなくてはならない。それぞれの土地に入り、どのような植物が生育しているか図鑑で調べ、また標本を採取し机上で、図鑑で調べるか、不明の場合は標本を専門家に鑑定してもらう。郵送等で鑑定してもらうこともある。

機材は図鑑、カメラ、野冊（標本採取保管用）、新聞紙（二つ折り）2～3日分を野冊に挟む、根ぼり、剪定鋏、野帳（メモ書き）が必要である。

採取はできれば花が付いて、根もあれば付いているもの、1枚の新聞紙に1種だけ標本作製を考えて挟む。新聞紙には採取地、採取日時、名前が分かれば植物名をマジックペン等で書く。同じように野帳にも書いておく。

植物名が確定したならデータ化し、その植物の分布状態を地図化することでその地区の植相状態を知ることができる。それに気象条件、地理的条件、地質的地形的条件、地史的条件下の植物分布も知ることができる。

### (2) 植生調査

山野は、森林、草原、竹林等があり、構成している植物がある程度固まって集団を作って生育している。その集団を「植生」といい、その集団の中でどのような植物が、どのような組み合わせで集まり生育しているかを調査することを「植生調査」という。調査は「ブラウーンブランケ (Braun Blanquette) 法」によって、広さまたは長さで行い、草地、湿地等では1m×1m、森林ではロープ等で10m×10m、または樹木の高さで決めた方形に囲った枠内を設定する。また長さでは線上に設定することもある。その場所の被度（総合優占度、植物の被覆の状態）と群度（群生状態）を目測する。

#### ア 被度

植物の地上部の地表面積に対する被覆の度合い（投影面積）を表す。

コドラート（枠）内でそれぞれの種がどれくらいの面積を覆っているかを目測し記録する。次の6段階とする。

- 被度 5 被度が4分の3以上を占める
- 4 被度が2分の1から4分の3
- 3 被度が4分の1から2分の1
- 2 被度が10分の1から4分の1
- 1 被度が10分以下
- + 個体数は小数で被度は非常に低い

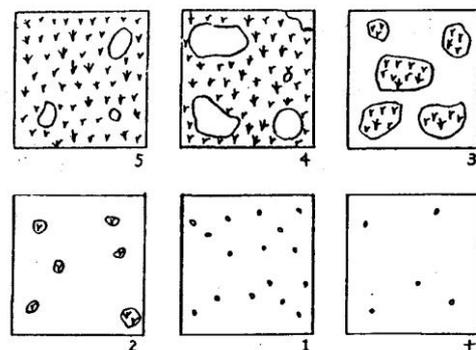


図 V-1 被度のあらわし方（平面図）  
（倉内一二の図）



### 3 藤岡地区の植物

#### (1) 藤岡地区の概要

藤岡地区は、林野面積が総面積の約74%を占めている中山間地である。西部から北部にかけては、猿投山(標高629m)、折平山(標高628m)、三国山(標高701m)、大岩町北部の山地(550m)等の高い山地の連なりに囲まれている。しかし、猿投山は猿投地区に属し、藤岡地区との境は、麓までの200~300mの段差で走る猿投断層である。三国山も頂上は岐阜県土岐市に属する。

中部以南の平野部は、平均標高が約100~300mの小高い丘の連なりで、比較的緩やかな傾斜地になっており、南部は最低標高80mの西中山町の端にかけて広がり、東部も標高が大体同じ90mの上・下川口町で矢作川に接している。この平野部は堆積準平原である。堆積準平原は砂礫が堆積した場所で、瀬戸累層といい、また周伊勢湾地域といわれ、粘土層を挟むので、西中山町、深見町、藤岡飯野町等では古くから粘土採掘、それに砂礫採掘が行われ裸地が現在でも見られる。

砂礫層に作られた田は、水持ちが悪く、谷間に流れる川に堰を作ったため池の農業用水を使っていた。そのため、ため池の上流部には湿地ができ、また湧水がある場所では、湿地植物でも貴重な東海丘陵要素植物(シデコブシ、シラタマホシクサ等)が多く生育している。

当地区で、東海丘陵要素植物が多く生育する場所は愛知県緑化センターであり、中でも昭和の森は、植生が豊かである。その他湧水湿地が見られる場所は、白河町北部山地の池城池周辺湿地群、三箇町北部山地の湿地群、藤岡中学校・加茂丘高校・飯野小学校が囲む谷間周辺の湿地群等が代表湿地である。

1970年代の高度成長期には、当地区内の谷間や丘陵地は、宅地開発で多くの団地や工場が作られ、また、南部の西中山町や御作町にはゴルフ場が作られ、ため池がなくなるか再構築され、東海丘陵要素植物の生える湿地が少なくなってきた。

上川口町や御作町北部の山地では、百月国有林の一部として残されているが、47豪雨(1972年7月の豪雨)で大打撃を受け谷間が抜け、植生が流され岩盤だけが残る状態になった場所が多い。その復興のため治山工事で、多くの砂防ダムが建設され、上流部は土砂で満杯になっている。それが大沢川堰(木瀬町・御作町境)等で、上流部に新しい湿地が形成されている。それに木瀬ダムや大沢ダム(下川口町)には大きいダム湖ができ、自然は改変され、観光地となっている。

愛知高原国定公園は、南部では下川口町と御作町・上川口町の一部、北西部では三国山南に聳える「めぐみの森(西市野々町)」、矢作川沿いが指定地である。めぐみの森は展望台までの登山路付近には自然植生が残されているが、周辺部の山地はスギ・ヒノキの植林地になっていて、植生が貧弱である。



写真 V-3  
足助地区上脇町から見た猿投山



写真 V-4 三国山: アンテナの林立

## (2) 山地の植物

### ア 三国山と周辺

この地区の北西部の山地には、最高峰の三国山（701m）があり、頂上のアンテナ群の林立が目立つことで見つけやすい。頂上付近は土岐市に属し、キャンプ場として開発されていて、金刀羅神社横からの車道が上っているが、豊田市側でないので車道の植生は岐阜県側である。北側の土岐市側や西側の瀬戸市方面は緩やかな山地で植生も豊かであるが、豊田市側は急な傾斜地で入山し難く、スギ・ヒノキの植栽が多く、植生は貧弱である。

植生図からも三国山や折平山はほとんどがスギ・ヒノキの植林地であることが分かるが、猿投山よりも高いことから、頂上近くでは温帯性の植生が見られそうであろうと、まず南山麓の登山路を探しながら、調査に臨んだ。

南の裾は、西市野々町の田畑が開け、人家があり、日当たりのよい山麓には市内の山地に普通見られるコナラ林がある。アオハダ、アカシデ、アベマキ、クリ、シラカシ、タカノツメ、リュウブ、ヤマザクラ等の高木層、ウツギ、ウリカエデ、オオバヤシャブシ、コバノミツバツツジ、タニウツギ、ダンコウバイ、ミヤマガマズミ、ヒサカキ等の亜高木・低木層の樹木があり、地上や木を這うアケビ、サネカズラ、フジ、ツルグミ、テイカカズラ等のつる植物、シダ類のコシダ、シンガシラ、マメヅタ、花を咲かせるキンミズヒキ、スズカカンアオイ、ナキリスゲ、モミジイチゴ、ヤブコウジ等の草本層が見られるが、多分かつてはアカマツ・コナラ林の植生であったと想像できる。

登山路を探しながら谷間に入る。やはりスギ・ヒノキ林で暗く、自然植生の高木はなく、高さ2～3mの低木のカナクギノキ、コクサギ、シロモジ、シラキ、タマアジサイ等が少し見られるだけである。水際の岩にはミカワチャルメルソウ、ミヤマハコベ、テバコモミジガサ、ツルネコノメソウ、ニッコウネコノメソウ、タニギキョウ等が辛うじて付着している。谷を登ろうと挑んだが急峻で滑り、危険ということで引き返す。

地図から「めぐみの森」の西奥に「北戸越峠」があり、瀬戸市の上品野町までの市道が確認できる。

まず、北戸越峠付近の植生を調査した。近くの谷間には、ミヤマハハソ（アブキ科）が生育する。ミヤマホウソとも呼ばれ、県内では少なく市内では足助、下山、旭、稲武地区のやや高地の山地に点在する種である。その他アカガシ（ブナ科）、イヌガシ（クスノキ科）、シロダモ（クスノキ科）など沿岸性の常緑樹が見られる。

多分、この付近の年平均気温が高いからであろう。このような場所で気温が高くなるのは、標高400m前後の猿投山や六所山でも霧がかかる山腹地あたりと同じで、常緑樹が生育していることは、県下の同じ条件下の森林地で見られる生育現象でもある。

この市道沿いは明るく植物も見られる。コクサギ、アオダモ、イヌシデ、ウリハダカエデ、エンコウカエデ、ケケンボナシ、オニツルウメモドキ、タマアジサイ、ヤマハンノキ等亜高木から低木が見られる。中でもイヌザクラはやや珍しい。王滝溪谷の名木指定のほか、六所山等に生育するサクラで、ウワミズザクラとよく似るが、花枝に葉がつかない。オオベニシダ、イヌガンソク等のシダ類、ミヤマキケマン等の草本類が生育する。

上品野町から三国山頂へは登山路はなく、保線路や辛うじて残る瀬戸市との境道を登ることになる。



写真V-5 キンラン

上述のように、豊田市側はスギ・ヒノキが密生し暗く、ミヤコザサが林床を被っている。その中でも東大演習林（瀬戸市側）との境に少し植物が見られ、キンランの発見があった。

瀬戸市との境の信長の狼煙場跡と言われる辺りに少し変わった林があった。落葉広葉樹の林でアカシデ、イヌザクラ、イヌシデ、イタヤカエデ、ウラジロノキ、ウリハダカエデ、ハクウンボク、ヤマナラシ、ヤマボウシの大きな木が多く、その中に常緑樹のシロダモの高木や幼木が混じっている。

一部頂上付近にはモウソウチク林が見られるが、これは瀬戸市に入植した開拓民が植えたものが繁茂して豊田市側に入ったものである。

三国山の麓でめぐみの森との間に流れる川筋には、砂防堤を築いた時の作業道があり、植生が戻りタマアジサイ、ヤマアジサイ等の低木にリョウメンシダ、ミヤマシケシダ（イワデンダ科）愛知県準絶滅危惧（NT）、シケシダ等のシダ類が見られ、今まで藤岡地区には見られなかったユリワサビ（アブラナ科）、サラシナショウマ（キンポウゲ科）も発見できた。

#### イ めぐみの森と周辺

かつては「郡民の森」として親しまれ、麓にはキャンプ場やバンカローがあり賑わいを見せていたが、豊田市に合併後は訪れる人も少なくなり、管理人がいたが、2012年頃から閉鎖されている。

頂上への登山路は急峻で滑りやすいが、麓からの植生垂直分布の移り変わりが分かる山でもある。展望台から尾根伝いに天狗岩に行け、折平山に連なり、猿投山との間の戸越峠に至る。また東中腹には林道が通り、戸越峠へ行ける。

春、めぐみの森の麓では、小さくか弱いヒメウズの花が見られ、フモトスマレ等も多い。キャンプ場付近ではギフチョウが訪れるスズカカンアオイが地面を被う。

麓は公園化され、イロハカエデ、シデコブシ、ヒメシャラ、ツバキが植栽されている。山地を登りはじめるとアオキ、アラカシ、アセビ、イヌツゲ、シキミ、シラカシ、ソヨゴ、ヒイラギ、ヒサカキ、ヤブツバキ等の広葉常緑樹が見られ、アオハダ、アカシデ、アベマキ、コシアブラ、コナラ、タカノツメ、シロモジ、ダンコウバイ、ホウノキ等の落葉広葉樹が混じってくる。少し乾燥した背には、アカマツ、エンコウカエデ、コックバネウツギ、コバノミツバツツジ、シラキ、ネジキが見られ、足元ではフモトスマレ、マキノスマレ、コウヤボウキ、アキノキリンソウ、タガネソウ等の草本層が現れ、登るにつれ、エンコウカエデ、コハウチワカエデ、ハリギリ等温帯性の植物も出だし、ユズリハも見られる。展望台に近づくとツガ、ゴヨウマツが生えだし、タムシバ（モクレン科）の高木が目につく。タムシバは葉をかむと甘いので、山仕事をして疲れた時に口にしたい、「かむしば」が訛ってタムシバになったという。花がコブシに似て白く目立つことから、コブシということもあるという。この展望台付近には多くの株があったが、見晴らしをよくすることで伐採されたことは悔やまれる。この場所

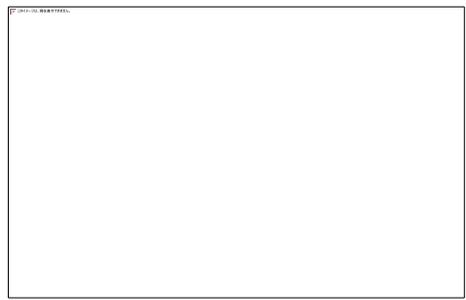


写真 V-6 スギ・ヒノキ林 三国山

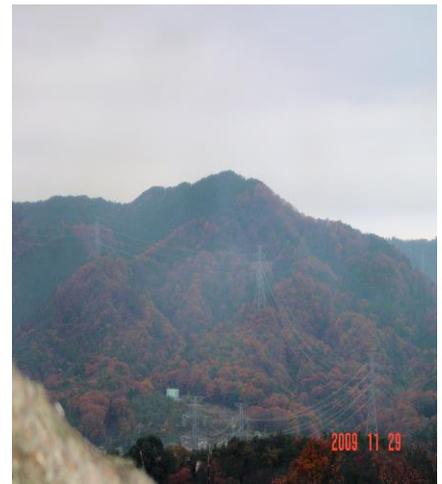


写真 V-7 めぐみの森  
急峻な登山路

以外にも少し高い山地に見られる種である。

展望台付近は草地でアズマネザサが多く、サトヤマトンボ（ラン科）、オカトラノオ（サクラソウ科）、クマイチゴ（バラ科）、トウバナ（シソ科）、ノコンギク（キク科）等の草本層にカキノハグサ（ヒメハギ科）が見られる。カキノハグサの黄色な花は6月頃目立つ東海地区の山地の乾燥地に見られる種である。また愛知県でも珍しいリュウキュウマメガキ（カキノキ科、シナノガキともいう）の伐採後の芽生えが見られるが、多分大木であったことであろう。



写真 V-8 カキノハグサ

秋には2cmほどの小さな実が黄色から暗紫色になり、柿渋をとった。保護したい柿であるが、麓にも見られるが大木はない。

折平山（628m）に続く峰の尾根伝いには、コバノミツバツツジに似たツツジの仲間のダイセンミツバツツジ（ツツジ科）があり、クロソヨゴ（モチノキ科）も見られた。この種は猿投山（629m）にもあるのと同じで、600m前後の標高と気候に関係がありそうである。

#### ウ 折平山

めぐみの森の尾根伝いに頂上へ登れる。

植生を見るに、豊田市側はスギ・ヒノキの植林で、見るべき植物は少なく貧弱で群落をつくるまでの場所がない。辛うじて瀬戸市との境を走る境界道沿いには植物が見られる程度である。峯は乾燥地であるからアカマツ（ほとんど倒木）、コバノミツバツツジ、ダイセンミツバツツジ、ネジキ等のほか、常緑樹のアセビ、イヌツゲ、サカキ、ソヨゴ、ネズ、ヒサカキ、ヤブツバキが見られ、植林地の少し明るい場所には、シロモジ、カナクギノキ、コアジサイ等の低木が見られる程度である。

中腹を「めぐみの森」麓から戸越峠へ走る林道沿いには、上部や下部にはスギ・ヒノキの植林地が覆うのに道路ということで、キンミズヒキ、クマイチゴ、コアカソ、コアジサイ、ニガイチゴ、ノリウツギ、ヤマアジサイ等本来の植生が見られるが群落にはならない。戸越峠の林道出入口付近には、春、黄色で鮮やかな花を付けるジャケツイバラが見られる。人を寄せ付けぬ実に豪快なバラで、三国山、猿投山の麓にも見られる。

その他タマアジサイ、アオキ、中には薬草であるやや県下では少ないカリガネソウ（シソ科）が見られる。猿投山にもあるが、この頃、薬草研究のためとして採取され少なくなってしまった。

#### エ キノコ岩等の岩山

石畳町にある足湯から南東に見られる山々には、風化せずに残っているいろいろな岩があり、キノコ岩、ダンゴ岩といわれる山頂がある。

キノコ岩はキノコと同じ形の岩が写真のように地上に浮いているように見える珍しい岩である。この場所近くには、東海丘陵要素植物の一種であるフモトミズナラ（ブナ科）の群生地があり、キノコ岩を見ながらフモトミズナラが見られるという山地の特徴がある。また南の尾根を行くと岩が重なったダンゴ岩の山頂に着く。この山地は植林がなく、本来の植生のアカマツ・コナラ林であるが、アカマツは枯れ、コナラ林が優占種となっているのは、ほかの市内の雑木林と同じ特徴でもある。



写真 V-9 キノコ岩 石畳町



写真 V-10 キノコ岩付近の雑木林

オ その他の山地

(ア) 裸地の山地

三国山の東の白川町や三箇町（この場所にはため池に関わる湿地があるが後述する）、大岩町（北は最高標高 550m）では、トロミルが各所に設けられ、瀬戸物の原料（石粉）が生産されていた。そのため裸地の山地が多く見られたが、47 豪雨で土砂流失を起こし木瀬町、御作町等に甚大な被害が出た。それ以後トロミルは廃止され、砂防工事が行われ、アカマツに肥料木のヤシャブシ類が植生された。その後、大分、植生が回復してきたが、アカマツは枯れヤシャブシ類が残っている。まだこの写真のように、砂地がむき出しになっているサバ土採掘場跡地があり 40 年後の今日でも植生が戻っていない。本来はススキ、クズが入り、アカマツ、コバノミツバツツジ、ヤマハギが入ってくるが貧栄養な土地のため、時間がかかるようだ。



写真 V-11 サバ土採掘場跡地  
三箇町北部山地

(イ) 常緑樹の森

南部地には多分常緑樹の森が多くあったであろうが、現在では、社寺林にわずかに残されているだけである。白川町の蔵円寺と八柱神社の背後の社叢林、石飛町の石飛神社の社叢の山地、北曾木町の八柱神社社叢林、北一色町の藤岡神社の社叢林、西中山町の八柱神社の社叢林のわずかな場所にしか残っていない。

a 円蔵寺と八柱神社背後の社叢林

白川町の北の山麓に当地区では珍しい広い常緑樹の森が見られるのが、この社叢林である。

八柱神社ではツクバネガシ（ブナ科）の大木高さ 19m 胸高周 2.2m があり、その他、ツブラジイ（ブナ科）、シラカシ（ブナ科）が優占し、スギ・ヒノキが少し混じる。蔵円寺の裏山も同じでカシ・シイ類が見られる。



写真 V-12 白川町八柱神社のツクバネガシ

#### b 石飛町洲原神社のツガの山地

標高 200m ほどの山地にある神社で、団地の東にあり急な参道が続く。当地区藤岡飯野町からは北に小高い山地が見られ、年中緑に覆われている。モミではないかと現地調査すると、ツガ（マツ科）であった。ツガが 18 本ほどあり、中でも高さ 17m、胸高周囲 195cm の大木が見られる。このような標高 200m 前後の山地に自生とは珍しい。ツガはやや標高の高い猿投山、炮烙山、面ノ木峠等の山地に自生し、猿投山のツガ群落は「ツガ群落」として市指定名木である。その他、ツガ以外にはツブラ



写真 V-13 ツクバネ 洲原神社境内

ジイ、アラカシ、サカキが生育し、準東海丘陵要素植物のフモトミズナラ（ブナ科）、オヒガンギボウシ（キジカクシ科別名バランギボウシ）がある。その他、多いのがツクバネ（ビャクダン科）である。高さ 1m ほどの低木、半寄生落葉低木でアセビ、スギ等に寄生するという。神社東の御岳社付近にも多く見られるが、歩道を被うほどに繁茂し、雑木扱いで伐採されている。当地区では、御作町の城ヶ山展望台付近（標高 200m ほど）、木瀬町大沢川や不動滝付近に多い。石野地区千鳥町のツクバネは市指定名木である。半寄生のため移植が難しく、その場所にだけ生育し、寄生木が切られると枯れてしまう。旭地区旭八幡町の八幡神社には、県指定天然記念物「八幡サクサイソウ・ツクバネ自生地」があるがサクライソウは自滅、ツクバネはスギを伐採したため多くが枯れていることから指定が危うい。

#### c 藤岡神社のツブラジイの森

この神社の東に団地ができる以前は、鬱蒼とするツブラジイの森で、当地区の常緑の森の典型的な社叢林であった。また、東の谷にはシデコブシの大群落がある自慢の谷であったが団地造成で埋められなくなり、社叢林も境内が暗いということで伐採されて明るくなった。まだ社叢林の北西の半分が残されていてコウヨウザン、シラカシ（大木で高さ 19m、胸高周 2.7m）、ツブラジイ、ツガ、モミ（大木で高さ 25m、胸高周 3m）にスギ・ヒノキ林が見られる、当地区の重要な天然資源として保護されることを望む。

#### d 田茂平町八幡神社の社叢林

ツガの大木があり、モミ、スギ、ヒノキも大きい。周りにはアカマツ、アベマキ、ホオノキ、カスミザクラ、クリ、タカノツメの木々に、ナツツバキが 2 本生育している。

#### e 西中山町八柱神社の社叢林

スギの大木が優占種であり、アラカシ、ツブラジイの常緑樹の大木がある。南部の暖かい気候のためタブノキ（クスノキ科）の大木も生育している。タブノキはもともと沿岸性の常緑広葉樹であるから、このような内陸地に入り込む種は珍しい。低木層にはヒサカキ、ヤブニッケイ、ソヨゴ、モチノキ等の常緑樹が多いのもタブノキと同様である。

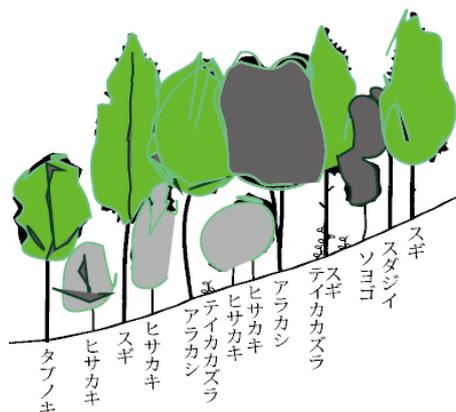


図 V-5 西中山町八柱神社の社叢林  
植生断面図 富田氏作成

### (ウ) 雑木林

人家の近くの裏山は、薪炭のために数年ごとに伐採が繰り返されてきた。それが薪炭の山であり雑木林で、別に二次林ともいう。伐採されることで樹木が更新されるわけである。コナラ（ブナ科）が典型的な更新木で冬に切られると春に株元から新芽が出る。この出た芽が2, 3本の木に成長する。別に芽生えたアカマツとともにアカマツ・コナラ林を構成する。当地区は粘土や土砂採掘の方が多く、山地は凸凹にされた場所が多く、アカマツ・コナラ林の形成は少なかった。裸山が多く、犬伏川は白濁の水が流れる川として長年矢作川を汚染していた（大方は工場排水）。今日では濁流もなく、雑木林も増えて、清流が流れている。荒地、裸地のこの地に、唯一残った県有林の山中に、昭和30年頃、県緑化センターが設置され、県の緑化の中心を担うことになり、県民の憩いの場にもなり、山地が保護されてきた。特に「昭和の森」として緑化センター東の森が保護されたこと、また、この地方固有の東海丘陵要素植物の生育地が保護された等、緑の街として中心的な役割を負う地区になった。東海丘陵要素植物群でもこの昭和の森に残されたシデコブシ、ミカワバイケイソウの生育数は多く、特にミカワバイケイソウの生育地は東海自然歩道沿いの谷はもちろん幾筋かの谷間に見られる。詳しくは湿地については東海丘陵湧水湿地の項で扱う。

しかし、ここ昭和の森ではコナラが少なくフモトミズナラ（ブナ科）に代わっている。この樹木も準東海丘陵要素植物であるが、この地区の地質の違いで生育種に違いが出ているわけである。このフモトミズナラもアカマツと同じようにブナ枯れ病で枯れ、大木がだんだんなくなってきた。



写真 V-14 フモトミズナラの葉  
カシワの葉に似る



写真 V-15 フモトミズナラ  
特に昭和の森に多い

### (3) 草地の植物

普通雑草といわれ嫌われている田や畑の草本類も市内の上郷高岡地区等の低地では外来種がほとんどを占めている。しかし、この地区では、まだ在来種のハコベ、ホトケノザ、ミミナグサ、ハハコグサ等が春の草花として花を咲かせている。やはり、ハルジオン、オオイヌノフグリ、オランダミミナグサ、ヒメオドリコソウ等の外来種も入り込んでいる。

藤岡飯野町の空き地での草地の植生調査を示すと次のようである。2011年の春5月の調査では、67種の草本が生えており、在来種に、約30%、20種の外来種が入り込んでいた。この地区のような中山間地では外来種としては多い割合である。日本のタンポポはここでは見当たらずセイヨウタンポポが見られ、チチコグサもウラジロチチコグサに代わり、オオイヌノフグリやオランダミミナグサはどこでも見られる種となり、在来種の仲間という様子である。アレチマツヨイグサ、

イタドリ、イモカタバミ、イワニガナ、ハコベ、ウラジロチチコグサ、オオイヌノフグリ、オオジシバリ、オオバコ、オオバタネツケバナ、オニタビラコ、オキノゲシ、オヘビイチゴ、オランダミミナグサ、カキドオシ、ギシギシ、キジムシロ、キツネノボタン、キュウリグサ、キランソウ、キレハヒメオドリコソウ、クサノオウ、ゲンゲ、コメツブウマゴヤシ、コメツブツメクサ、コモチマンネングサ、サギゴケ、スイバ、スギナ、スズメノエンドウ、スズメノカタビラ、スズメノヤリ、セイヨウタンポポ、セトガヤ、セリ、タカサゴユリ、タチイヌノフグリ、タネツケバナ、チガヤ、シロツメクサ、トキワハゼ、ドクダミ、ナズナ、ニガナ、ニワゼキショウ、ネジバナ、ノゲシ、ノミノツヅリ、ノミノフスマ、ハコベ、ハハコグサ、ハルジオン、ヒメオドリコソウ、ヒメジョオン、ヘビイチゴ、ホトケノザ、ミゾソバ、ミチタネツケバナ、ミツバ、ミツバツチグリ、ミドリハコベ、ミミナグサ、ムラサキカタバミ、ヤエムグラ、ヤハズエンドウ、ヤブカンゾウ、ヤブヘビイチゴ、ヨモギ 67 種のうち外来種は 20 種。(藤岡地区飯野町春埜神社前空き地)



写真 V-16 ミツバツチグリ  
山地の土手に春、黄色い花を付ける。ツチグリのような 2~3cm の太くて硬い根茎を持ち 3 枚の葉を出すことで名がつく。どこにでもある。(三葉土栗)

#### (4) ため池と周辺の湿地

堆積準平原と言える当地区の平地の田は水が砂礫にしみこみ、保水力が足りないため、山麓や山頂にため池が多く設置され農業用水として利用されている。高い場所では、三箇町の北部岐阜県土岐市境の山地にため池(無名池)が、また白川町にも同じように北部山地に「池城池」が造られている。

平地では猿投山の山麓に多数のため池がある。これらのため池には元々の水生植物のタヌキモ類、ノハナショウブ、ジュンサイ等が生え、上流には土砂が貯まり程よい湿地ができ、湿地植物が生える。特に当地区の堆積準平地の谷間のため池上部の湿地には東海丘陵要素植物のシラタマホシクサ等が生える。

西中山町の北部山地には、大池を始め、上流には別所池、その奥に小倉池、一つ山を越えた谷にははす池、よし池等 5 つの池がある。また深見町、迫町、藤岡飯野町、北一色町の西部には多い。

しかし、これらの池は近年のかさ上げ工事で改良が進み、三面張りの立派なため池となっており、また、養鯉池として利用されている池もあるため、水生植物はほとんど見当たらない。かつて貴重なタヌキモ類が生えていたといわれていた北一色町の神池等の 5 つのため池は 3 つの大きなため池に改築され水生植物の生存跡すらない。

#### ア 池城池等の県境のため池

##### (ア) 霞ヶ池湿地

白川町北西部剣坂川上流、三国山の麓、川に設置された砂防堤にできたため池が霞ヶ池である。近年土砂が堆積したので、水はなく湿地植物が生えている。

主な植物種は、ヨシが優占種で、すっかり土砂が覆っている。少し水がある場所は足が食い込み抜けられないなどまだ土砂が固まっていない。そのような場所にはアオコウガイゼキショウ、

アカバナ, アキノウナギツカミ, アケボノソウ, オオミゾソバ, オニスゲ, ガマ, チゴザサ (多い), チダケサシ, ケチヂミザサ (多い), ヒメシロネ (多い), ヘラオモダカ, ヒメナミキ, ミズギボウシ, ミゾソバ, ミソハギ, ミヤマシラスゲ等の湿地植物が見られた. 特別な植物ではなく泥沢湿地に見られる植生である. 周りにはノリウツギ, タニウツギ等の低木層にアカマツ・コナラ林の高木層が占めている.

ヒメナミキは高さ 30cm くらいの湿地に生えるシソ科の草本で, 市内は下山地区にあるくらいで, 県下でも生育地が少ない. それは小さく人目に触れ難く, 湿地の草の間に隠れるように生えているからであろう.

この湿地のすぐ南にスギ林があり, 植生を調べた. スギ林のため樹木は入りにくく, つる植物が多く見られた. アマチャヅル, オニドコロ, キレハノブドウ, スイカズラ, テイカカズラ, ノブドウ, ミツバアケビ, ヤイトバナ, ヤブガラシ, ヤマノイモ等である. スギ林下では木々に登る植物が多い.



写真 V-17  
霞ヶ池湿地—ヨシが多い



写真 V-18 ヒメナミキ  
小型で湿地に生育, 白花, 少ない

#### (イ) 三箇町北部山地湿地群

三箇町の北部山地で岐阜県土岐市に通ずる県道脇には, 以前は湿地植物が多く生育していたが, 今日ではヨシやススキの草本に, ノリウツギ, イヌツゲ等の低木が茂り, 面影はない.

##### a 林道入口小湿地 (三箇町湿地 1 号)

ここから南の山に入る林道が登っているその脇の左谷には, 小湿地 (20m×5m) が見られる. 周りの木々はアカマツ, クロマツの高木層でノリウツギ, イヌツゲ, ミツバツツジ, 多いのはマルバノキでこれらの低木層で囲まれている. 中の湿地は明るくヌマガヤにアオミズ, アキノウナギツカミ, アブラガヤ, キセルアザミ, ショウジョウバカマ, スズカアザミ, ノギラン, ヒメシロネ, ポントクタデ, ミヤマシラスゲ, ヤノネグサ等の草本層が見られる. 中にノリウツギ, イヌツゲ, ケヤマハンノキ, イヌウメモドキ, ミヤコイバラ, ミヤマウメモドキ等の低木層が侵入しつつある泥沼湿地である.



写真 V-19  
三箇町山地湿地群の一つ  
県境の小湿地 三箇町湿地 1 号

## b 林道沿い湿地（三箇町湿地2号）

頂上を越えた林道は、池の方へ向かう。その途中に平地が広がり湿地ができています。仮に「林道沿い湿地」（50m×20m）と名づけた。林道沿いにはハルリンドウ、イワショウブ、ショウジョウバカマ、ノハナショウブ、水の流れているあたりにはキセルアザミ、ヤチカワズスゲ、サワシロギク、ミズゴケも多い。モウセンゴケ、ミミカキグサ、ホザキノミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ等の小さな草本層も見られる。その他、アブラガヤツリ、イ、イトイヌノハナヒゲ、ウメバチソウ、オトギリソウ、カキラン、コハリスゲ、コマツカサススキ、サワギキョウ、サワヒヨドリ、シカクイ、シロイヌノヒゲ、スイラン、ニッポンイヌノヒゲ、ヌマガヤ、ノギラン、ヒメシロネ、ホソバリンドウ、ヤマイ等に低木層のヘビノボラズ、ノリウツギ、ミヤコイバラが入り込んでいる。市内の湿地に生育する種が多いように見られるが、希少種の生育もある。



写真 V-20 林道沿い湿地  
三箇町湿地 2号

イワショウブ（チシマゼキショウ科）は、日本海側の湿地に生える種といわれたこともあるが、亜高山の湿地に生育している種であり、結構、県下にも数か所南下しており、古くから存在する湿地に生育する種である。市内では小原地区は大洞町北部湿地、藤岡地区はこの湿地や池城池湿地、矢並湿地東湿地に生育する。県下では豊橋市から渥美半島、みよし市、知多半島に生育している等限られた地域だけに生育することで、愛知県準絶滅危惧（NT）に指定されている。



写真 V-21 池北斜面の湿地  
アカマツ、イヌツゲ、ソヨゴ等が入り込んでいる。

ミズギクも矢並湿地等に生育するが愛知県準絶滅危惧（NT）で、高原の湿地に生育する種である。この湿地の周りの木々には、マルバノキも多く、ヘビノボラズ（メギ科、準東海丘陵要素植物である）も生育し、ミヤマウメモドキ（モチノキ科）は愛知県絶滅危惧 II 類（VU）に指定されている。三箇町山頂の池湿地（三箇町湿地3号）の池にも生育している。ミヤマウメモドキは低木層であるが、ここの木は背が高い。最近ラムサール登録湿地の上高湿地にも生育することが分かった。岐阜県側の湿地に多い種であるから、県下では豊田市と瀬戸市に生育するだけである。林道沿いの注目に値するほどの湿地とは見られにくいですが、詳しく調査することで貴重な湿地植物の生育が確認できた。

## c 三箇町山頂の池湿地（三箇町湿地3号）

林道を下った先は行き止まり、多分砂防工事のための林道である。ここから南に右の谷を下ったところにため池がある。大きな池であるが名がなく、こんな静かな場所にすてきな池があることに感動する。ヒルムシロ、イヌタヌキモ、ヌマハリイ、ハリイ、ホソバミズヒキモが生育する。

北斜面が湿地になっているし、水が入り込んである上流部あたりにも砂地があり、湿地が見られる。

北斜面の湿地(40m×5m)は傾斜 30 度でかなりきついが水が染み出ている。ヌマガヤが多く、

アリノトウグサ，イワショウブ，イトイヌノハナヒゲ，  
 イヌウメモドキ，ウメバチソウ，オオイヌノハナヒゲ，  
 カリマタガヤ，キセルアザミ，ケシンジュガヤ，コマツ  
 カサススキ，サギソウ，サワシロギク，サワヒヨドリ，  
 シロイヌノヒゲ，トキシソウ，トラノハナヒゲ，ニッポン  
 イヌノヒゲ，ヌマガヤ，ハルリンドウ，ヒナノカンザシ，  
 ヒメジソ，ヒメハギ，ホタルイ，ホザキノミミカキグサ，  
 ムラサキミミカキグサ，ミカヅキグサ，ミミカキグサ，  
 モウセンゴケ，ワレモコウが生育し，周りの低木層には  
 ヘビノボラズ，ウメモドキ，カマツカ，サワフタギが生育する。



写真 V-22 三箇町湿地 3号の池

南の水が流入するあたりは，湿地 (30m×10~15m) で，ヌマガヤが優占し，イヌノハナヒゲ，  
 トウカイコモウセンゴケ，ホザキノミミカキグサ，モウセンゴケ，ミミカキグサ等が生育し，  
 周りはアカマツ，イヌウメモドキ，マルバノキ，オオカメノキ，イヌツゲ，ソヨゴ，ホオノキ，  
 ネズ，ヒノキが囲む。

#### (ウ) 池城池湿地 白川町北部山地

三箇町北部山地湿地群に隣接するが，入るには三箇町北部浄水施設横の林道を上り，途中ヒ  
 ノキ林の中を左に登る．登ると広い湿地に出る．それが池城池湿地である。

広いため池であったが，半分は土砂で埋まり水が溜まる池 (45m×40m) は小さい．池にはヒ  
 シ，ヒツジグサ，ヒルムシロが生育している．上流部の湿地 (50m×45~50m) には，イノシシ  
 が入り込み，ぬた場にして湿地を壊している．秋シロイヌノヒゲが一面を埋め尽くす様子は，  
 シラタマホシクサを連想させる．カキラン，ケシンジュガヤ，コバノトンボソウ，トウカイコ  
 モウセンゴケ，ホザキノミミカキグサ，モウセンゴケ，ミミカキグサ，ムラサキミミカキグサ  
 等の小さい植物に，サワシロギク，サワヒヨドリ，シカクイ，タイワンカモノハシ，チダケサ  
 シ，ノハナショウブ，ノギラン，ホソバリンドウ，ミカヅキグサ等の湿地植物が生育している。

一段と上に残っている古い湿地には，イヌノヒゲ，イワショウブ，カキラン，ミズスギ，ノ  
 カンゾウ，ノギラン，ノハナショウブが生育しており，低木層のクロミノニシゴリ (準東海丘  
 陵要素植物)，ヘビノボラズ (準東海丘陵要素植物)，サクラバハンノキ (準東海丘陵要素植物)  
 の幼木に，周りはアカマツにフモトミズナラ (準東海丘陵要素植物) が囲む広い湿地である。  
 すばらしい広い湿地で，藤岡地区の低地の準堆積平原と同じ東海湧水湿地群の一つと考えても  
 よい．というのもすぐ上の県境からは土岐市の柿野で，その湿地と同じ植生の東海丘陵要素  
 植物が生育することでその続きとも捉えることができる．珍しいナンキンナナカマドがある。

イノシシの入らない施設を設置することも必要であろう。



写真 V-23 池城池—白川町北部山地



写真 V-24 池城池上部湿地

#### イ 韮川砂防ダム付近の湿地

白川町南部と上渡合町の境を流れる川が韮川で、キノコ岩、ダンゴ岩の山の南麓を流れる。

川に並行して通る木瀬町から石畳町に通じる林道脇には湧水が出ており、小湿地が幾つか見られ、ヘビノボラズ、サクラバハンノキ、シマジタムラソウ、フモトミズナラとくにハンノキが生育している小湿地が多い。

この道筋には多くのトロミルが設置され、山地を削除して石粉を生産していたので山地が荒れていた。そのため47豪雨で土砂が流され木瀬町、御作町に甚大な被害が出た。その後砂防ダムが設置されたが、今日では上流部はほとんど土砂で埋め尽くされた。そこにできた湿地は新しいが、木々の生育が始まり、湿地植物はほとんどなくなっているが、中でもアカメヤナギが大群落を形成している。シダ類ではウラジロ、コゲジゲジシダ、コシダ、シシガシラ、ジュウモンジシダ、ゼンマイ、ヒメワラビ、ベニシダ、ヤマイタチシダ、ヤワラシダ等がある。

#### ウ 上渡合町西部湿地群：藤岡温泉入口付近の湿地

北一色町北部、上渡合町の境、湿地の存在場所は北一色町と見ていたが、上渡合町に属する。藤岡温泉入口付近にあるため池とその下流にできた湿地である。下流に団地がある。

池は25m×30mの広さで、下流(N20°E)に向け3つの湿地がある。池には、ヒシ、ヒツジグサ、ヒルムシロが生育する。湿地No.1は26m×13m、No.2は25m×10m、No.3は15m×7mの広さである。

アブラガヤ、アリノトウグサ(多い)、イヌノハナヒゲ、カルカヤ、ケシンジュガヤ、コイヌノハナヒゲ、サクラバハンノキ、サルマメ、サワシロギク、サワヒヨドリ、シカクイ、スイラン、タイワンカモノハシ、トウカイコモウセンゴケ、ヌマガヤ、ニッポンイヌノヒゲ、ヒナノカンザシ(多い)、ヘビノボラズ、ホザキノミミカキグサ、ホタルイ、マネキシンジュガヤ、ワレモコウ等が主湿地植物で、よく調べたらシデコブシの幼苗があった。周りはアカマツ、リョウブ、北側はヒノキの雑木林である。

上部に池があっても、湿地は乾燥が激しく、砂礫がむき出しになっている場所もあり、湿地植物が辛うじて生育している状態で、イヌノハナヒゲ、イトイヌノハナヒゲ、ケシンジュガヤ、カルカヤ等イネ科の乾燥に強い湿地植物が多く、ヒナノカンザシ(ヒメハギ科)も多く見られる。



図 V-6 北一色・上渡合町湿地群



写真 V-25 サクラバハノキ  
環境省準絶滅危惧 (NT)  
ヒヤケ池の周りに多い。県内には多く生育する。また準東海丘陵要素植物である。



写真 V-26 上渡合町西部湿地群の池



写真 V-27 上渡合町西湿地群 No. 1 の湿地

エ 北一色町北部湿地群：ヒヤケ池湿地

折平町との境、北一色町北部にあるため池で、すぐ東側は宅地造成用に造成された土地がある。

ため池は小さいが、上流部に東海丘陵要素植物であるシデコブシが数多く生育する、あまり知られていないため池である。池の左上流部はヒノキ林の元に多数のシデコブシの株があり、芽生えが多数出ている。ヒノキが大事であるということであろうがシデコブシとは知らずに下草刈りで切られている。右上流は湿地になっており、ミヤコイバラに遮られながら進むと、シデコブシの大木が数本生育している。湿地には、ヌマガヤを始めオニスゲ、カキラン、サワシロギク、スズカアザミ、ノギラン等湿地植物が生育し、ノハナシヨブ、ヘビノボラズ等の希少種が生育している。

サクラバハノキ、ハンノキが池の周りに、山麓にはキキョウの綺麗な花が咲き、オオカメノキ、タニウツギの花も素晴らしい。

池にはジュンサイ、ヤナギスブタが生育している。池の改修工事に気を付けたい。



写真 V-28 ヒヤケ池—ジュンサイ

オ 石飛町山地湿地群—間ノ山川沿い

石飛町から木瀬町に向かう林道沿いには、ところどころ湧水が出ている小湿地ができています。

小湿地が道路沿いにありシデコブシが生育しているのに、切られ、株から幾本かの芽生えが出るが、出る度に切られている。

少し谷間に入るとオオミズゴケやノイバラの中に、シデコブシが見られる。多分、このあたりまでが藤岡地区のシデコブシの自生の東限のようであるが、市内の東限はここから東北、小原地区の大平町北部山地に、この頃、大群落が見つかった。タムシバ、シマジタムラソウ、ヘビノボラズ、ミヤマトサミズキ、トウカイコモウセンゴケ、モウセンゴケが生育する。イガタツナミソウ（シソ科）も見られる。

また、ナツツバキ（ツバキ科）が 10 本あるが、シデコブシの湿地の周辺に生育するので、これもこのあたりまでが東限である。サルスベリに似たようなスベスベの樹肌、夏に花をつける。ヒメシャラも県内、市内でも見られるが花が少し小さい。

この林道の一つ南の谷の北斜面には湧水が出ており、シデコブシがところどころに生育している。

この山地から平地（木瀬町）に出るあたりには、藤岡地区では珍しいマツムシソウ（マツムシソウ科、愛知県準絶滅危惧（NT））が生育し、カザグルマ（キンポウゲ科、愛知県絶滅危惧 II 類（VU）、環境省準絶滅危惧（NT））等貴重な種が生育している。



写真 V-29 ナツツバキ



写真 V-30 ナツツバキ

#### カ 藤岡飯野町湿地群－学校が囲む湿地群

加茂丘高校、藤岡中学校、飯野小学校に囲まれた山地の谷間には、東海丘陵湧水湿地の典型的な湿地が存在する。東海丘陵要素植物のシデコブシ、ミカワバイケイソウ、シラタマホシクサ、トウカイコモウセンゴケ等が生育するも、残念ながら藤岡地区にはミカワシオガマは生育しない。学校群の東の境は、国道 419 号線の木瀬町から県営農地開発事業矢作川北部地区西川工区の農場を経て、御作町に至る市道の途中、アイシン化工のフェンスに囲まれた谷間付近までの広大な面積に湿地群が存在する。ここの湿地を藤岡飯野町湿地群 1 号フェンス下湿地群、2 号加茂高校西湿地群、3 号藤岡中南湿地、4 号柏原池湿地群、5 号飯野小学校南藤源池周辺湿地群と一応名付け、調査した。



図 V-7 飯野町湿地群—学校が囲む湿地

(ア) 1号 フェンス下湿地群

市道西のフェンス下には何か所かの湿地が存在する。農場からの山地を上り、フェンス沿いに下がると谷間にでる。早春まず目に付くのがシデコブシ（約 30 株、大木で高さ 8m、胸周り 0.15m）である。普通市内では赤花が多いのに白花が多いのはどうしてか。中でも花びらが少ない白花も見られる。この白花はシデコブシでなく、コブシで、混生しているのには驚く。ミカワバイケイソウが水の流れに沿って大群落を作っているし、カザグルマ（キンポウゲ科）、サクラバハノキ、シマジタムラソウ（シソ科）、フモトミズナラ、ヘビノボラズも多い。少し乾いた周りにはナツツバキが生育する。ここから上流部や下流部にシデコブシやミカワバイケイソウが続く。

a シロイヌノヒゲ湿地

上流部は峯が崩壊し裸地となり、雨のたびに土砂が流出して作られた湿地である。最大 150m×50m で下流部はすぼんでいる。周りにはアカマツ・コナラ林でアズマネザサが密生していて、シデコブシ、クロミノニシゴリ等の木々が見られる。



写真 V-31 シロイヌノヒゲ  
シロイヌノヒゲ湿地



写真 V-32  
シロイヌノヒゲ湿地上部崩壊地

b 古いシデコブシ湿地

下流部の湿地（150m×50m）で小型のシデコブシが多いので、多分長年生育していた様子が伺える。ハルリンドウが多く、サワシロギク、ショウジョウバカマ、モウセンゴケ、ヘビノボラズが多い。ここに南から谷が流れ、ミカワバイケイソウ（多数）やシデコブシが上流部へと続く。シデコブシは約 130 株が生育している。

c 池のほとりの湿地

下流部に進むと池がある。池の水がどのように吐けているか見るに、上部の市道の下に排水口がありコンクリートの升からオーバーフローで流している。池にはジュンサイ、ヒルムシロが生え、砂地にはナガエミクリ（ミクリ科）、オニスゲ、シカクイが生育している。池のそばや湿地に入るもミヤコイバラが侵入を阻む。モウセンゴケ、サワシロギク、ノハナショウブ、ヘビノボラズが生育する。

この池から、藤岡中学校の東にフェンスが続いており、フェンスの両側には何本かのシデコブシが続く。



写真 V-33 リンドウ  
古いシデコブシ湿地



写真 V-34 ナガエミクリ  
池のほとりの湿地

(イ) 2号 加茂丘高校西湿地群

湿地に入るには、加茂丘高校裏手の危ない崖を下る。崖は農場を作るときに排水工事がなされずにそのままか、工事をしたか不明であるが、多分下流部のため池が土砂に埋め尽くされていることから 47 豪雨で削られたのではないかと想像する。

崖を下がり谷に出ると、シデコブシが北谷に向かって生育している。下流に下って行ってもシデコブシが続く。平地に至る中程に、イヌブナ（ブナ科）が 2 株（1 株は高さ 15m, 4 本, ほかは斜面上に 1 株）ある。イヌブナは猿投山や六所山、面ノ木峠等高い場所に生育種であるが、このような標高 100m くらいに生育するのは、城見町 (50m) や田之土里に見られるが、一般的には見られない。谷にはナツツバキ（大木 1 株）も多く、ハナノキの幼苗が 10 本ほどあり、下流部の平地ではシデコブシとともに、ハナノキの 8m ほどの木を含め、同じく 10 本ほどが見られる



写真 V-35 ウメバチソウ



写真 V-36  
シデコブシー加茂丘高校西湿地

のは、珍しい。今まで藤岡地区にはハナノキは生育していないとされていた。よく見ると細く、低い小さい木であるから、47 豪雨以降に土砂が埋まった頃、生育した木々とともに生えてきたのであると想像する。そのことから、どこからか種子が飛んできたとして周囲を探すと加茂丘高校の裏手にハナノキの大木があった。

この湿地の代表的な植物をあげる。イヌブナ、オオカメノキ、カザグルマ、クロミノニシゴリ、コウヤミズキ、サクラバハンノキ、サワギキョウ、シデコブシ（多い）、ショウジョウバカマ、ナツツバキ、ハナノキ、ヘビノボラズ、ミズギボウシ等である。



写真 V-37  
ハナノキー加茂丘高校西湿地

### (ウ) 3号 藤岡中学校南の湿地

この藤岡飯野町湿地群内ではシラタマホシクサが唯一生育している場所である。小さい池（水溜まり）から東に上った下弦の月型の湿地(50m×50m)があり、周りにはアカマツ、クロマツ、コナラ、ネザサ、フモトミズナラの林で、ハリエンジュも見られる。池の西にはシデコブシが生育している。

湿地には同じくマツ類が入り、イソノキ、イヌツゲ、ウメモドキ、クロミノニシゴリ、ソヨゴ、ネズ、ノイバラ、ヘビノボラズも侵入している。シダ類ではウラボシ、コシダがある。

アオコウガイゼキショウ、アブラガヤ、アリノトウグサ、イ、イヌノハナヒゲ、イヌノヒゲ、キセルアザミ（少）、ケシソウ、ケトダシバ、コイヌノハナヒゲ、コマツカサススキ、サギソウ、サワシロギク、サワヒヨドリ（少）、シカクイ、シラタマホシクサ、シロイヌノヒゲ、ショウジョウバカマ、スイラン、タイワンカモノハシ、チゴザサ、トウカイコモウセンゴケ、ニガナ、ニッポンイヌノヒゲ、ヌマガヤ、ヌマスギ、ノハナショウブ、ノイバラ、ハルリンドウ、ヒナノカンザシ、ホザキノミミカキグサ、マネキシソウ、ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、モウセンゴケ、ヤチカワズスゲ等の草本層の湿地である。

この湿地から下流の南に向けて狭い谷が続き、シデコブシが生育した場所があり、もっと下ると団地の東の谷に出る。砂防堤があり、土砂に埋まっていて、カザグルマが木々に纏わりついていて、オタルスゲ、サクラバハンノキ、ヘビノボラズ、ヒツジグサ（水中）、ミヤコイバラが見られた。



写真 V-38 藤岡中学校南湿地



写真 V-39  
小さい池がある藤岡中学校南湿地



写真 V-40 カザグルマ  
つる性、この湿地等に多い

(エ) 4号 柏原池湿地群

中学校西山中には、柏原池（50m×19m）と上流部に新柏原池（60m×47m）があり、新柏原池の上流部と下流部に湿地ができています。新柏原池にはジュンサイ、ヒルムシロ、ヒツジグサ、岸边にはオオミズゴケが多く、トウカイコモウセンゴケ、モウセンゴケが生育し、柏原池には同じくジュンサイ、ヒルムシロ、ヒツジグサが生育している。新柏原池の上流部は50mほどの谷間の湿地でシデコブシが6本1株と2本1株あり、クロミノニシゴリが数本生育している。新池と池の間は湿潤でスギ、フモトミズナラ、ハンノキが生え、シデコブシが40本ほど生育している。この間に北から流れる谷にもシデコブシの2株4本や幼苗が生育し、ヘビノボラズ、サワシロギクが生育している。柏原池の南側にもシデコブシが8本1株、3本1株が生育している。山地はアカマツ、コナラ、サカキ、ソヨゴ、タカノツメ、ネズ、ヒサカキ、リョウブ等の雑木林である。

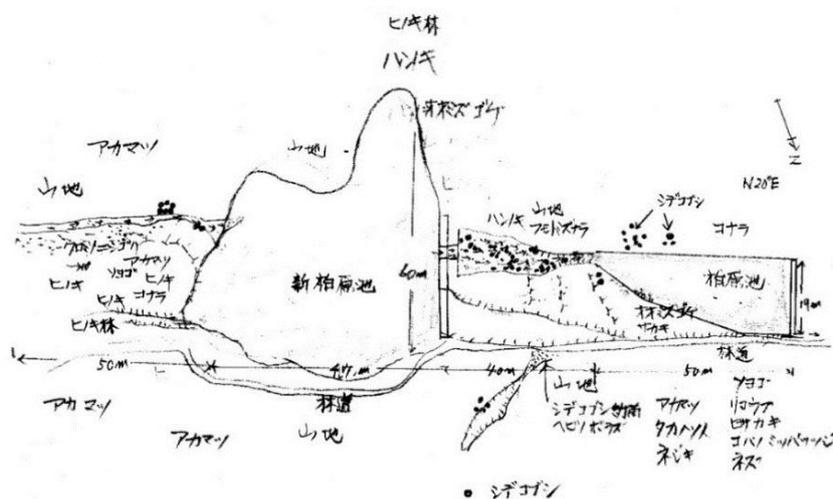


図 V-8 柏原池湿地群

この柏原池に入るには国道 419 号の中学校の運動場入口から西に下った谷間からである。この入口にもシデコブシの幼苗が2, 3本ある。国道から見ると幾筋かの谷間があり、ここでは湧水が出ていて、クロミノニシゴリ、シデコブシ、ヌマガヤ、フモトミズナラ、ミカワバイケイソウが見られる。特に早春には国道からもシデコブシの花が見られる。



写真 V-41  
新柏原池—藤岡中学校西



写真 V-42  
ジュンサイ—新柏原池

(オ) 5号 飯野小学校南藤源池周辺湿地群

飯野小学校南に藤源池があり、水生植物のノタヌキモが生え、周りにアオコウガイゼキショ

ウ、アゼナ、イヌノハナヒゲ、ハリイ、サルマメ等の小型植物が生育し、クロミノニシゴリやズミ等の湿地性木々が生育し、シデコブシの幼苗も見られた。

藤源池から南に下がった林道から下に入ると小さな湿地(12m×4m)があり、サクラバハンノキやスギに混じってシデコブシ、ヘビノボラズ、イ、ゴウソ、オオミズゴケが生育している。そのすぐ下に、鉱泉の源泉(貯水槽)があり、下から上流に向け池(20m×10m)がある。池にはフトヒルムシロが生え、上流は湿地(20m×5m)になっており、シデコブシが7、8本、クロミノニシゴリ、サクラバハンノキ、イヌエンジュ(マメ科)が見られ、乾いた場所にナツツバキが7、8本生育している。シロバナウメモドキが林道脇に、カザグルマも絡みつく。普通ウメモドキは薄ピンクの花であるが、ここでは白花で、葉には細かなざらつく毛がないのはイヌウメモドキと同じで、珍しいウメモドキである。

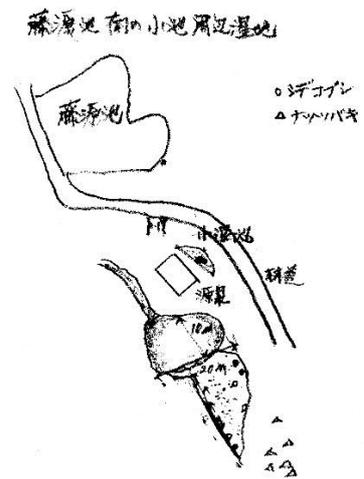


図 V-9 藤源池

(カ) 6号 木瀬町 ミツバ屋, (岸本トマト) の北谷

学校が囲む湿地群から離れるが、市道の東、アイシン化工のフェンスが走る農場の北の谷にもシデコブシの花が咲いている。下の谷は深く、北斜面はシキミが大変多く、谷底は湿地があるも、サクラバハンノキ、ナツツバキの幼木が目立つが日当たりが悪く草本層の生育はままならず、カザグルマが木々に纏わりつき、シデコブシの幼木が1株だけあった。上流部は岩の谷間でシデコブシが5、6株あり、道からも見られる。

キ シデコブシ群生湿地—池田川上流湿地—藤岡飯野町

県道北一色三河広瀬線から入った養鯉池(団地の南谷)にしている休耕田の上流部の谷には、シデコブシが多数生えている湿地がある。

奥に入ると細長い泥湿地(30m×5m)で、スギ林の中シデコブシが40数本生育し、北西の谷には少し水の浸かった場所があり、ヤマトミクリが生育する。この奥地も泥湿地でシデコブシが十数本生育しているが、倒木も多い。

池の手前の左谷の入口にも、シデコブシの幼苗が生育するが、伐採されてしまう。

田の北の山中にも、数本シデコブシが生育する。



写真 V-43  
池田川上流湿地入口—藤岡飯野町

ク 新池周辺湿地群—藤岡飯野町

池田川上流湿地群の南西にもため池があり、新池、北洞池、崩壊し水漏れの小狭間池がある中で新池が大きくて、広場ではキャンプをするような場所になっていたようだ。

小狭間池へ行く新池上岸にはシデコブシ2本ほどがハンノキと競っているが、日陰のため生育は良くない。

新池付近の山地の植生は、この地区の雑木林と同じでアカマツ・コナラ林でアカマツが枯れ、

アベマキ、ヤマザクラ、コナラの高木落葉広葉樹に、アラカシ、シラカシの高木とアセビ、ヒサカキ、ヤブツバキの低木と併せ常緑広葉樹が勢力を増している。低木のコバノミツバツツジ、ウリカエデ、コアジサイ、コツクバネウツギ、ヤマウルシ、ネジキ、マルバアオダモの植生である。池の南岸にザイフリボク（バラ科）の白い花が目に入った。別名シデザクラとも言い、落葉低木でしめ縄につけるシデに似ていることから名が付く。ところどころで見かけるが花時期が4月下旬で、この地区ではほかに田茂平町の南部の川に沿った山裾に大木がある。

小狭間池に行く谷が泥湿地になっており、水の流れに沿ってシデコブシがハンノキと混生し、ノリウツギ、ヘビノボラズの低木がミヤマシラスゲ、ヤチカワズスゲの谷地坊主と共生しているが、シデコブシは日陰のため威勢がよくない。アオキ、スズカカンアオイ、ショウジョウバカマはスギの樹下に生育している。



図 V-10 藤岡飯野町西部ため池周辺湿地群新池周辺湿地群



写真 V-44 新池—藤岡飯野町西部



写真 V-45 小狭間池の上部—水漏れ



写真 V-46 谷地坊主—小狭間池



写真 V-47 ザイフリボク

#### ケ 小田池周辺湿地－藤岡飯野町

藤岡飯野町の北西の小高い山頂にため池がある。

小田池 (27m×28m) で、ジュンサイ、イヌタヌキモ、フトヒルムシロ、ホソバミズヒキモが生育し、上流部の半分が湿地である。

キセルアザミ、アゼガヤ、アリノトウグサ、イ、イワショウブ、ホソバシュロソウ (シュロソウ科)、モウセンゴケが見られる。



図 V-11 小田池－藤岡飯野町

#### コ 大沢川湿地群

県道木瀬・富田線沿いで、東から木瀬町と御作町との境に流れる川が大沢川で、47 豪雨以降県道近くに砂防堤が構築され、土砂が流入して埋まっている状態が湿地になっている。上流部に大沢滝があり、不動明王が祀られ、近くに御岳講の碑が祀られている。上流部にも数多くの砂防堤が構築され小原地区に続く。また、大沢滝の上部にもため池があり上流部に湿地ができていたが小原地区に所属する。ため池までは不動滝からの散策路が整備されていて、このごろ夏に蛍狩りが行われている。下流の湿地を「大沢川湿地」と名付ける。



写真 V-48

大沢川湿地－木瀬町と御作町境

#### (ア) 大沢川湿地

大沢川は 9 割以上土砂で埋まり、湿地はまだ若く、広く、ヨシの湿地であるがよく調べると幾筋かの川の流れてでき湿地植物が生育している。

アキノウナギツカミ、アケボノソウ、アブラガヤ、アリノトウグサ、イ、イトイヌノヒゲ、イヌノハナヒゲ、イヌホタルイ、コマツカサススキ、サワヒヨドリ、シカクイ、シロイヌノヒゲ、ツルヨシ、トダシバ、ヌマガヤ、ヒメオトギリ、ヒメジソ、ヒメシロネ、フトイ、ホザキノミミカキグサ、ホタルイ、ボントクタデ、ミカヅキグサ、ミヤマシラスゲ等の湿地植物が生育している。水のある堤付近はフトヒルムシロがある。ぬかるみに入るにはヌマガヤやミヤマシラスゲの谷地坊主に上がる必要がある。古くからの湿地に生育するホザキノミミカキグサ、ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ (今回は未確認) 等の小さな食虫植物も見られる。数年前まではこの湿地の特徴となるシロイヌノヒゲが一面秋の湿地を染めていたが、今秋は少ない等、年々湿地環境が代わるので経年調査する必要がある。

まだ、47 豪雨後に構築された砂防堤が上流部の小原地区へと幾つかあり、それぞれに湿地植物が生育している。

#### (イ) 大沢滝付近

大沢滝付近は、夏は涼しい場所である。滝の前にはタラヨウ、イロハモミジが植樹され、この頃では、アジサイ等やフジも植えられている。滝前の山麓には、マルバノキ、コウヤミズキ、マンサク等の天然の樹木があり、花も紅葉もきれいなのに伐採されている。

滝から登る散策路は整備されているが、ツクバネ等が伐採されている。散策路には、ガンピ、シラキ、フモトミズナラ、マルバノキ、マンサク等が生育しているから、伐採には気をつけたい。

(ウ) 大沢滝上部ため池上の湿地

大沢滝の上流のため池は、小原地区に属すが、調査はここ藤岡地区に記載する。

大沢滝からの登りが長い中で、このような静かな山中に大きなため池があり驚愕する。所属は小原地区であるが、散策路はよく整備されていて上流部の湿地に着く。

ため池の上流部に土砂が流れ込み程よい湿地(66m×25mの三角形)になっている。池の淵にはツルヨシが生育する。



写真 V-49 大沢滝上流部のため池  
小原地区北篠平町

湿地にはイトイヌノヒゲ、イトイヌノハナヒゲ、イヌノハナヒゲ、カザグルマ、カルカヤ、ケシソウ、シカクイ、シロイノヒゲ、トダシバ、ニッポンイヌノヒゲ、ハルリンドウ、ホザキノミミカキグサ、ミカヅキグサ、モウセンゴケ等の湿地植物に、ヘビノボラズ、ヒサカキ等が侵入している。周りはアカマツ・コナラ林で、コウヤミズキ、ナツツバキ、フモトミズナラ、マルバノキが混生し、峰にはゴヨウマツが見られる。ハルリンドウ、ヘビノボラズ、フモトミズナラ等湧水湿地の特徴ある植物が見られる。

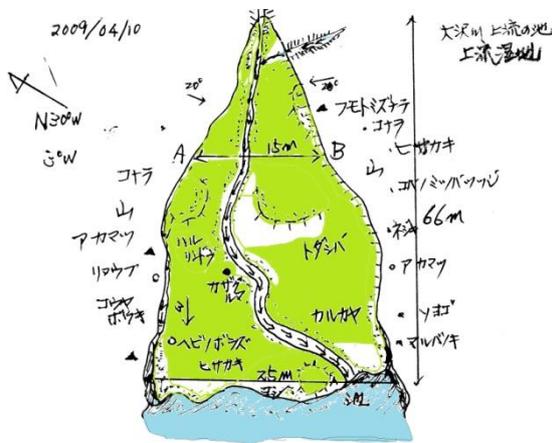


図 V-12 大沢滝上流部ため池上の湿地

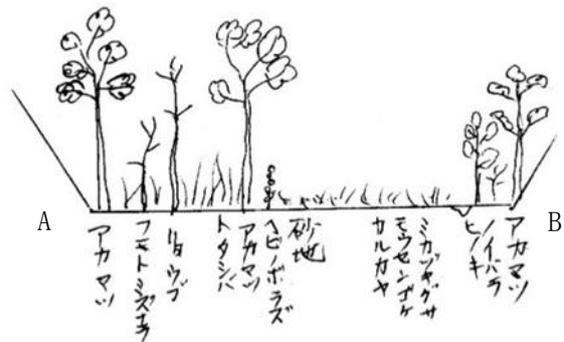


図 V-13 植生断面図—大沢滝上流ため池湿地

サ 藤岡ふれあいの館付近湿地群

藤岡ふれあいの館付近には湿地が多く、深見町の藤見橋南川向の湿地、中央発条藤岡工場北下湿地、洞イ洞湿地、御内平奥の谷湿地、藤岡飯野町の藤岡ふれあいの館北谷湿地とその北の小湿地、深見町水神碑の奥湿地、田茂平町名古屋グリーン西の湿地等が谷間にあり、シデコブシが数多く自生している。藤源工業が粘土採掘を撤退したあとに砂防堤が構築された後に土砂が上流部に堆積した湿地が多く、藤岡ふれあいの館の北谷湿地、御内平奥湿地は同じような植生である。湿地が新しく、サクラバハノキとシデコブシの生育する湿地で、明るい湿地に生育するシラタマホシクサはない。



図 V-14 藤岡ふれあいの館付近湿地群

(ア) 藤見橋南川向の湿地—深見町

図のとおりシデコブシの小湿地 (30m×30m), キセルアザミ, ショウジョウバカマ, ヘビノボラズ, ミズギボウシが湿地性草本で, ハンノキの高木も生育している.

山頂付近はフモトミズナラの大群落である.

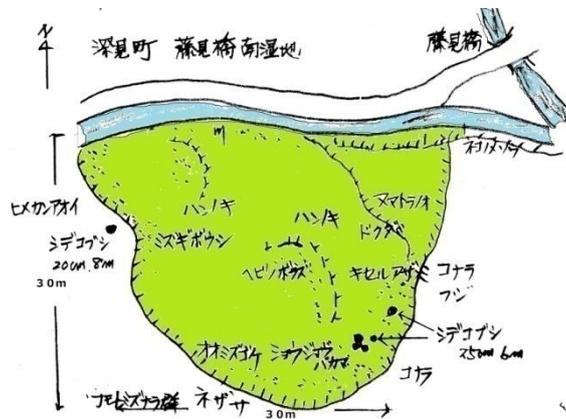


図 V-15 藤見橋南川向の湿地—深見町

(イ) 深見町東中央発条藤岡工場北下湿地—深見町東

団地の東宅地造成地の東や上部の中央発条藤岡工場北下は, 崖や幾筋かの谷があり, 東には湿地の平地が広がっている. ハンノキやシデコブシが多く, ミスミソウ, カタクリ, ヒメカンアオイ等が生育している. 水の流れる谷はミカワバイケイソウ, シデコブシが筋になって生育している.



写真 V-50 ミカワバイケイソウの幼苗  
工場北下湿地

(ウ) 藤岡ふれあいの館北谷湿地

ふれあいの館の北の谷は、上流へは不燃物処分場「グリーン・クリーンふじの丘」の北に続く砂防堤に出る。谷へ少し入ったところに砂防堤が築かれ、上流部は少し水が溜まり、中にヤマトミクリが生育している。上部はサクラバハンノキ林下に広がる湿地で、周りにシデコブシが生育し、上流部の谷までシデコブシの生育が続く。

この谷の北谷も湿地になっており、シデコブシやハンノキが見られる。

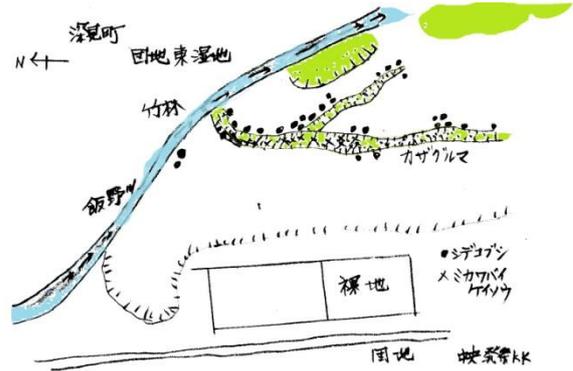


図 V-16 東工場北下湿地  
ミカワバイケイソウ、シデコブシ自生地



写真 V-51 サクラバハンノキ林  
ふれあいの館北谷湿地



写真 V-52 ナガエミクリ幼苗  
ふれあいの館北谷湿地

(エ) 洞イ洞湿地—深見町東

ふれあいの館の川向に団地があり、団地の南に谷がある。ここもシデコブシが数本生えている泥沼湿地で、入りにくい。かつては田であり、耕作していたものであろう。サクラバハンノキやシデコブシの生育する沼って入りにくい湿地で、樹下のため湿地植物は少ない。

山麓にショウジョウバカマ、ナガバノスミレサイシン、ハンカイソウ、ミヤマウズラが見られる。



写真 V-53  
サクラバハンノキ、シデコブシ  
洞イ洞湿地—深見町



写真 V-54 ナガバノスミレサイシン  
太平洋側の湿地の周辺に多いスミレ。  
日本海側のスミレサイシンも市内には入っている。

(オ) 深見町御内平公会堂奥の谷湿地

この谷の入り口付近はスギ林で、奥に砂防堤が構築されており、水が少しあるが上流部は土

砂が流入して湿地になっている。サクラバハンノキ、シデコブシの見事な湿地である。水のある堤際には、ナガエミクリが見られる。サクラバハンノキ林の湿地で、春にはアギスミレ、マキノスミレが一面に花を付け、アケボノソウ、エゾシロネ、シマジタムラソウ、ムカゴニンジン  
の芽生えがあり、シデコブシが多く、白い花を付ける。



写真 V-55  
サクラバハンノキの湿地  
構築された砂防堤の上部に新しくできた湿地で、また樹下で暗くシラタマホシクサはない。御内平湿地上流部

(カ) 水神碑の奥湿地

谷筋は、暗く、シデコブシの大木が幾本かある程度で、湿地植物はオオミズゴケくらいである。奥は休耕田で、所有者がビオトープとして水を張り、また山麓や畦も草刈り等でよく管理されている。田の中には、水生植物のフトヒルムシロ、ナガエミクリが生えており、素晴らしいビオトープになっている。このように地元民が管理保護していくことが必要であろう。水神はこの谷に発電所用の取水口があったことによる。



写真 V-56 ナガエミクリ  
御内平湿地の下流部



写真 V-57 休耕田が管理されビオトープとなり、フトヒルムシロ、ナガエミクリが生育している。

(キ) 名古屋グリーンカントリー西の湿地—田茂平町

このような場所に湿地があることは、全く分からないが、昆虫研究家の案内で分かる。橋があり、林道があることから住民も出入りの様子が伺える。

林道からは、明るい広場に見えることから、湿地 (50m×15m) と分かる。シデコブシの大木が、2株あり、大木のほかにも、芽生えや小木が多数見られる。

アオコウガイゼキショウ、アギスミレ、アゼガヤツリ、アブラガヤ、カキラン、キセルアザミ、サワギキョウ、サワシロギク、シカクイ、ショウジョウバカマ、ニッポンイヌノヒゲ、ヌマガ



図 V-17 名古屋グリーンカントリー西湿地

ヤ、ケチヂミザサ、ヒメハリイ、ヒメシロネ、ミヤマシラスゲにオオミズゴケが多く、これら  
 明るい湿地に見られるシラタマホシクサはない。木々ではイヌウメモドキ、サクラバハンノキ、  
 ノリウツギが湿地に入り込んでいる。

#### シ 深見町常楽湿地群

深見町常楽交差点付近には、大小の湿地があったので深見湿地群と名づけたが、現在は団地東の小さな湿地(10m×5m)は潰され、交差点南西で、西中山町との境、国道419号線沿い県有林内の湿地「常楽湿地(仮称)」だけになる。



写真 V-58 常楽湿地

深見町常楽交差点南西 国道419号沿い

西山地からの水の流れがあり、タイワンカモノハシ、ヌマガヤが多く谷地坊主を作っている泥沼の明るい湿地(28m×29m)である。しかし、泥沼湿地でなく優占種のシラタマホシクサがあるので東海湧水湿地群の仲間である。草の元には小さいトウカイコモウセンゴケ、モウセンゴケ、ミミカキグサが見られ、アオコウガイゼキショウ、アリノトウグサ、イトイヌノハナヒゲ、イヌノハナヒゲ、キセルアザミ、コマツカサススキ、コタヌキモ(愛知県絶滅危惧 IA 類(CR)) サワギキョウ、サワシロギク、サワヒヨドリ、ショウジョウバカマ、タイワンカモノハシ、ノギラン、ホザキノミミカキグサ、ホタルイ、ミズギボウシ、ミカツキグサ等の湿地植物が生育し、イヌツゲ、ウメモドキ、クロミノニシゴリ、ノリウツギ、ヘビノボラズ、ミヤコイバラ等の低木が侵入し、周囲にフモトミズナラも見られる。山地との境にはミズゴケが多く、カキラン、ハルリンドウ、ヤチカワズスゲが生育している。西からはネザサが入り込み、山地はアカマツ・コナラ林である。常楽交差点付近は商店街、団地ができ発展してきたので、この湿地は、県有林内であるから現在まで存在し続けてきたが、将来にわたり存続できるか不安である。

#### ス 昭和の森湿地群

昭和の森には、各所に湿地が見られる。学習の森湿地から、北湿地、その道向かいの深見町岩花湿地、南では市道沿いの湿地群がある。とくに東海自然歩道沿いの湿地を含めた野鳥の森の谷筋、田茂平町西砂防堤湿地等にシデコブシとミカワバイケイソウの自生が500mほどずつ続く湿地がある。



図 V-18 昭和の森湿地群(県緑化センター)

(ア) 深見町岩花湿地

休耕田が湿地になった場所(100m×40m)であって、周囲にサクラバハノキが入り込み林になっている泥沼湿地という状態である。オオミズゴケが多く、シラタマホシクサもあり、オニスゲ、キスゲ、コアゼガヤツリ、ゴウソ、シカクイ、サワギキョウ、サワシロギク、タイワンカモノハシ、ヌマガヤ、ヌマトラノオ、ノハナショウブ、ヒメジソ、ミズギク、中にはトキソウも見られる。下流の池にはヒツジグサ、カキツバタが見られるがカキツバタは植栽であろう。



写真 V-59 深見町岩花湿地  
サクラバハノキが多い

この道路の南は昭和の森山麓であり、シラタマホシクサの素晴らしい湿地になっている。(昭和の森北湿地仮称)シラタマホシクサが目立ち、イヌノヒゲ、イヌノハナヒゲ、オオイヌノハナヒゲ、サワヒヨドリ等が見られる。



写真 V-60 昭和の森北湿地



写真 V-61 シラタマホシクサ湿地  
昭和の森北湿地

(イ) 学習の森湿地－昭和の森南入口湿地

この湿地はよく管理されていて、散策者も多いが、シラタマホシクサが群生する程の水量や土砂の流れがある湿地ではない。上部もヌマガヤ一色という状態である。水の流れがあれば、また別の素晴らしい湿地になることであろう。春はハルリンドウ、トウカイコモウセンゴケ、モウセンゴケが多い。アリノトウグサ、サルマメ、サワシロギク、ショウジョウバカマ、タイワンカモノハシ、ヌマガヤ、ミズギボウシ、ヤチカワズスゲ等の湿地植物があり、周りにはシデコブシが植栽されていて、イソノキ、イヌツゲ、イボタノキ、ウメモドキ、クロミノニシゴリ、レンゲツツジ等の低木も見られる。



写真 V-62 学習の森湿地－昭和の森入口



写真 V-63 学習の森湿地上流

(ウ) 市道沿い湿地群

枝下工業団地北のトヨタ工場の市道北には、シラタマホシクサが多い大きな湿地(100m×30m)がある。粘土質で水が湧き出ていつも濡れているような斜面(傾斜15°南)の湿地である。

かつては粘土等の採掘場所であったかもしれないことは、斜面で粘土等土砂がむき出しになっている裸地であることでも想像できる。

トウカイコモウセンゴケ、ミミカキグサ、ホザキノミミカキグサ、モウセンゴケ等の食虫植物も多く、ヌマガヤ、イトイヌノハナヒゲやケシンジュガヤが谷地坊主をつくり、裸地を覆いつつ、低木のイヌツゲ、アカマツが侵入している。ここではとくにマツカサススキとコマツカサススキの両方が見つかった。コマツカサススキよりも穂が大きい。東三河にはなく西三河では旧豊田市、みよし市、岡崎市、安城市にあり、尾張には多い種で、藤岡地区では初めてである。

シダ類のミズスギも見られ、コシダ、ウラジロ、ゼンマイも見られる。



写真 V-64 シラタマホシクサの多い  
市道沿い湿地—昭和の森湿地群



写真 V-65 シラタマホシクサの多い  
市道沿い湿地—昭和の森湿地群

(エ) 野鳥の森周辺湿地(東海自然歩道沿い)

野鳥の森に南から入ってしばらくすると自然歩道沿いに小さな堤があり、いつも水が流れている新池(50m×30m)がある。池にはヒツジグサ、フトヒルムシロが一面に広がり、岸にはサワギキョウ、ノリウツギにオオミズゴケが生育する。ロープで囲まれている西土手はいつも湿り気のある斜面で、上部にトウカイコモウセンゴケ、下部にはモウセンゴケが住み分けしている。

この野鳥の森の中を東海自然歩道が登っているが、その脇の谷は湿地でシデコブシやミカワバイケイソウが上流にかけ生育している。この生育状態は、この野鳥の森の一つ西の谷や東の2筋の谷は、数千株のミカワバイケイソウ、数百本のシデコブシが上流へと続く。また田茂平町西の砂防堤の上流湿地(50m×20m)もサクラバハハンノキ、シデコブシの林にヘビノボラス、ノリウツギ、ミヤマイボタの低木が侵入しているオオミズゴケの湿地である。

市内でもミカワバイケイソウは藤岡地区だけに自生する特産品で特に、この地の幾筋かの谷に存在することは自慢したい。この写真 V-68 の谷は、一つ西の谷の散策路が通る小川を渡るための足場がある谷である。足場にミカワバイケイソウの芽生えが出る時期になると散策に邪魔になるからと刈り取られ、また高さが1m近くになるので、ハイカーのステッキで叩き倒されている状態を見かけることがしばしばある。この谷の上流と下流に渡り、シデコブシとこのミカワバイケイソウがサクラバハハンノキ、オオミズゴケとともに延々と自生している。



写真 V-66 野鳥の森  
堤上流のため池



写真 V-67 砂礫地のモウセンゴケ類  
野鳥の森新池西横



写真 V-68  
ミカワバイケイソウの芽生え  
散策路の足場、昭和の森



写真 V-69  
ミカワバイケイソウ

## (5) 提言

### ア 植栽種スギ・ヒノキの間伐

北西部山地はスギ・ヒノキの植栽地で、暗く、細い樹木が多く、自然植生の植物種が少ないところである。少し日光が射すことで植生が増え、昔からの自生種が蘇る。また、豪雨時に谷抜けの危険があるから、間伐を行う必要がある。

### イ 土砂採掘の危険性、採掘の禁止

東部の上・下川口町は、現在でも土砂を採掘している場所があり、矢作川筋では 47 豪雨で被害が発生し特に谷抜けし、土砂が流れ岩盤だけが残った状態の谷となり、土砂がないことで植物が根付かず植生が貧弱になっている場所もある。

そのような中で、ある 1 か所、百月国有林内で上川口町所属の山地に、ヒメバライチゴ、ハクウンボク、オオバウマノスズクサ、イイギリ等この地には少ない高地の植物が見られたことを特記する。

### ウ めぐみの森のキャンプ場の撤去と植物観察の拠点

めぐみの森は自然環境が豊かで、植生研究、また散策にも良い場所であるが、麓に設置されていたキャンプ場は放置され荒れが目立ち、危険な状態である。植物観察できる場所になるよう何らかの対策が必要であろう。

### エ 昭和の森湿地群の管理

昭和の森の中の湿地は、東海自然歩道の谷までは管理されているが、東海自然歩道の谷の東の谷 2 筋と田茂平町の西谷までは、管理が及んでいないと思われる。この場所は、シデコブシやミ

カワバイケイソウが多いので、県緑化センターの管理区域を広げるなど何らかの対策が必要であろう。

#### オ 学校が囲む湿地群－藤岡飯野町・木瀬町の保護管理

同じくシデコブシ、ミカワバイケイソウ等貴重な植物が多く生育する「学校が囲む湿地群（仮称）」は貴重な場所があるので、学校等各関係機関が連携して保護活動を教育に生かしていく等、今後いかに保護管理していくかが大きな課題である。エコパークの考えを取り入れるなどの対策が必要であろう。

#### カ スハマソウ（ミスミソウ種名）－加茂丘高校の校章の草花

当地区には、シデコブシ、ミカワバイケイソウ以外にも貴重な植物がある。加茂丘高校の校章に取り上げられているスハマソウ（キンポウゲ科現在スハマソウは品種名、ミスミソウに統一）は、この地区の特産種で山裾に多く自生していたが、開発、豪雨災害で自生地がなくなってしまった。

昭和の森や藤岡ふれあいの館付近にはわずかであるが、存在するし、また当地区のある箇所にはカタクリ、コタヌキモ、コモチシダ、ムギラン、ヨウラクラン等も存在するので、そっと見守ってほしい。

#### キ 特定外来生物の駆除

特定外来生物のオオキンケイギクが道路脇に春期、黄色い花を咲かせている場所が多い。自治区の協力の下、2014年から全市で実施している根から引き抜き絶やす運動を継続することが必要である。

#### ク ため池の改修時の配慮

本来の農業用水のため池のほか、粘土や砂礫採掘跡地の砂防堤、それに 47 豪雨後構築された砂防堤が各所にでき貯水されたが、時間の経過でそのため池に土砂が堆積し上流部に湿地ができた。このように当地区は新旧の湿地が多くでき、湿地性の植物が多く生育することになった。この地区の植物の特徴が湿地植物になった。しかし、近年、西中山町・藤岡飯野町・北一色町のため池は、かさ上げ工事で改修されたが、矢作川用水の水を一旦貯め置く貯水池と化して、上流部には湿地ができない構造になっている。それに養鯉池に利用されることもあり、水生植物が見られない池になっている。改修時には自然に対する配慮が必要である。